

私の寮舎は子供の家だった。朝起きるともう近所の子供が来てゐる。否、呑気な朝寝坊の私は子供に戸をたたくかれて起き出す事が多かった。水を汲んで来り、室の掃除をして呉れたのは大概子供だった。

夕方學校から歸る時はもう幾人かの子供が校門の前で待つてゐる。鶏の雛が母親の後をついて行くやうに、いつも四五人の子供が私のお伴をする。

その中の一人に『數枝さん』が居る。數枝さんは今如何したらう。と私は時々追憶に耽ける。音楽家志望の數枝さんは、青山學院へ入學したといふ話を誰からか聞いた事があつたが、その後の消息は知る由もない。

數枝さんは私が赴任當時の第一の訪問者で、四疊半の獨居生活時代からの別業であつた。

數枝さんの家は皆熱心な耶穌信者だ。

「私の家へお遊びにいらつしやい。」と度々數枝さんから、勧められたが、宗教といふ者に對して餘り潔癖といはふか、食はず嫌ひといはうか、兎に角さういふ方面に對して、頑固な私は一度も行つた事がない。

だが遂に行く約束をしてしまつた。それはクリスマス晩だった。

「屹度遊びに行くからね、迎に来てお呉れ」と云ふと數枝さんは大善びで早速家の父母に注申したらしい。がその晩私の所へ突然の訪問客があつたので到當行かすにしまつた。

二度も三度も迎へに来たが行かすにしまつた。その時は流石の數枝さんも腹を立てたと見えて二三日來なかつた。

數枝さんの父さんは執達吏をして居た。温厚

朝起きるとやがて下げ髪の無邪氣な數枝さんの聲がする。夜うす暗いランプの下で、机にもたれて私が書見をしてゐると、數枝さんはおとなしく書見の終るのを待つて居る。

「數枝さん、今晚は遅いが一人で歸れる？」
「一人でも大丈夫よ、イエス様を守つて下さるから！」

さういつて大概の晩はどんな遅くても、一人で歸つてゆく。それでも雨の降る晩などは、數枝さんの宅の門口まで送つて行つた。到當私の宅へ泊つてしまつた事がある。雪の降つて居る晩であつた。

「家の者は心配しないかい？」

と聞いても矢張り「イエス様を守つて下さるから心配はして居ない。」と云ひ乍ら平氣で居る。その時數枝さんは尋常三年生だった。

篤實な君子人が、冷やかな理智一片の人として其の職務を執行するといふ事は、如何にも矛盾してゐるやうに思はれてならなかつた。
「數枝さんのお父さんは、執達吏ではない。しつたくりだらう。」

戲談半分にかう言つてからかふと、その事を家へ言つて話した。その時も随分怒つて居たやうだった。

がそれも暫時で忽ち機嫌がなほつてしまふ。天真爛漫といふ事は子供共通の性質ではあるが、多くの子供にはやはり各自の個性があるその中には、ひねくれた、ねぢけた根性の子も無い譯ではない。

數枝さんは、眞に無邪氣な無垢な露ばかりも汚れて居ない自然兒——誇張ではなく神の子であつた。全く天真爛漫の正物だった。